

3. 妊娠・分娩期における母性意識の 変化の要因についての一考察

高知医科大学医学部付属病院	○池田 恵美子(30回生)
〃	浜田 裕子(〃)
兵庫県立成人病センター	神原 左知子(〃)
大阪府立母子保健総合医療センター	神崎 吏世(〃)
東京女子医科大学付属病院	杓野 陽子(〃)
虎ノ門病院	小林 伸子(〃)

I はじめに

現代は、母性喪失の時代であると言われる。従来、女性なら誰でも生まれながら持っている
とされた母性本能が、最近の子供の生み捨て、子供の虐待、育児ノイローゼ等の増加により、
改めて問い直されるようになった。

また、母性をとりまく社会状況も時代とともに変化してきた。核家族化、情報化社会、女性
の社会への進出など、社会状況の変化が母性に与える影響は少なくないであろう。

私達は、妊娠、分娩、育児は女性のライフサイクルにおいて、大きな試練であり、同時にこ
の時期こそ母性意識高揚の最も良い機会であると考えた。そして、個々のケースの母性意識の
形成過程をふまえつつ、妊娠、分娩、育児の各期を通じていかに母性意識の高揚を援助するか
を研究することにした。

II 研究方法

1. 研究目的

妊産婦の母性意識の変化を把握し、妊娠期、特に分娩前後における母性意識形成を促す要
因を探り、母性意識助長のための看護援助を考える。

2. 研究対象

昭和58年7月～昭和58年9月迄に高知市内の総合病院の産科を訪れた妊娠第9ヶ月、
10ヶ月の妊婦、産褥3日目の褥婦、産後1ヶ月の褥婦

3. 調査方法

アンケート用紙を用いた留め置き調査

III 結果及び考察

この研究を進める中で、母性意識が最も高揚するのは、胎動自覚時と分娩直後であることが
わかった。この時期は、妊産婦が、自分は母親であるという自覚を最も強く持つ時期だと言え
る。故にこの時期は、母性意識の高揚を助長する看護援助、教育を最も効果的に行なえる機会

であると考えられる。

現在、妊産婦の教育の場としては、母親学級をはじめ様々な場が存在し、個別指導や集団指導が行なわれている。これらの指導は、「母親となる女性が妊娠、出産、産褥、育児の知識と学習経験を得て、母親としての心構えをもつとともに、日常生活でそれを実践すること¹⁾」が目的である。しかし、今回のアンケート結果では、知識の十分、不十分と分娩前後の母性意識の変化には関連がみられなかった。このことは、現状の指導は、妊娠、分娩、育児に関する一般常識的な知識の提供、技術の伝達のみ重点がおかれており、母親としての心構えを促すような指導はなされていないということを示唆していると考えられる。

核家族化が進み、幼少時から思春期に、幼ない子供と接したり、育児行動を学習する機会が少なくなってきた現代の社会状況の中で、書物やテレビとは異なり、お互いの相互関係の中で展開される個別指導や集団指導のもつ意義は大きい。アンケート結果では、妊娠前に子供をもつことについて考えたことのある者、あるいは子供をもつことに対してよいイメージを持っている者は、分娩前後において母性意識の高揚がみられた。価値観の多様化に伴ない、女性イコール妊娠、出産という考え方だけでなく、様々な女性の生き方がとり上げられるようになったことから、現代は、女性が、妊娠や分娩を自分のこととして考えてみる機会が少なくなってきたと言えるのではないだろうか。このような状況の中で、個別指導や集団指導が、単に知識技術を伝達する手段として行なわれるのではなく、母親として、母性としての根本的、精神的な面への指導をも含むべきであると私達は考える。胎動自覚時には、実際に児を見ながら自分の手で育てるわけではないにしても、自分の体内で一つの生命を育てはぐくんでのだということを認識させ、母親となるのだという自覚を育て、生命の尊さを再認識させることができるであろう。また分娩直後においては、児を目の前にし、児を抱き、乳を飲ませる行動の中から、母親としての自覚、責任感を今後のより良い育児へと結びつけるような指導、援助が必要であると考えられる。

また、アンケート結果より、妊産婦を対象に妊娠から分娩、さらには分娩後育児に関してまで継続的な一貫した指導援助が受けられ、妊産婦が互いに交流をもち、不安や悩みを出しあい、共に解決していくことが出来るような、医療機関と家庭の中間的な役割を果たす施設の必要性が示された。現在行なわれている指導は断続的であり、また出産までの指導は受けられても、出産後、育児を行なう中で生まれた疑問や不安は、母親が一人で背負いこまなければならない場合が多い。このことから、出産後、退院後にも育児上の不安や問題を相談できる場が必要だと思われる。

母性意識の形成は、女性が生まれたその時点から始まるものであり、生育歴上のあらゆる経験により影響をうける。この結果、妊産婦の母性意識の形成度は個人個人によって異なってく

る。病院勤務の看護婦という立場から考えると、妊産婦が妊娠に気付き、外来受診に訪れる以前の、母性意識に関わることは出来にくい状況にある。しかし、妊産婦をとりまく社会背景を十分理解した上で、妊産婦が妊娠、分娩、育児といった経験を通じて、自主性を持ち、積極的に自らの母性の形成に取り組めるよう援助、指導しなければならない。そのためには、看護者は妊産婦とのより良い人間関係をつくり、コミュニケーションを十分にとることが必要であるだろう。看護者からの一方的な知識、技術の伝達でなく、妊産婦の考えていること、感じていることに耳を傾け、その中から共に学ぶという援助こそ、妊産婦の母性意識の高揚に結びつく効果的な援助である。

Ⅳ 終わりに

妊産婦に対する現在の個別指導、集団指導、その他の看護援助のあり方について、母性意識の高揚を助長するという点から考えてきた。母性意識は人間の内面的なものであり、それ自体漠然としたものであり、客観的に把握出来るものではないが、母親の行動を左右する基本的なものである限り、重要な一面である。

今回の研究では、どういった援助、指導が母性意識の高揚を助長し得るのかといったところまで、明らかにすることが出来なかったが、これを今後の課題として、常に妊産婦の内面に目を向け、指導のあり方を考える上で役立てて行きたいと思う。

最後に、この研究に御協力、御指導下さいました方々に深く感謝致します。

Ⅴ 引用文献、参考文献

- 1) 松野かほる：母親学級の再検討－母親学級は誰のためのものか、助産婦雑誌、Vol 35、No 11、1981、808頁～812頁
- 2) 平井信義：母性愛の研究、同文書院、1981
- 3) 上田礼子、他：妊娠・出産・産褥期の適応行動、母性衛生、Vol 22、No 1、1981
- 4) 川崎佳代子、他：妊産婦の精神衛生、母性衛生、Vol 23、No 4、1983
- 5) 三浦久美子、他：施設内から母子保健の継続看護をめざして、助産婦雑誌、Vol 34、No 9、1980
- 6) 木村和子：母性愛の本質を探る、助産婦雑誌、Vol 31、No 2、1977